

研究主題 「自分に挑み 未来を拓く」ために人間としての 在り方生き方を深めていく

埼玉県立大宮商業高等学校

1 研究主題の設定理由

本校は単独商業高校であり、生徒の7割前後が就職希望者である。17歳・18歳の生徒が自分の能力や適性を見極め、進路選択を行っている。そのため、継続的な進路指導に外部講師や卒業生からの体験談で情報を得ながら、自分にあった進路先を決定している。本校での3年間を系統的に、「自分の生き方」を考えさせ、進路設計（人生設計）の一助となるよう、研究主題とした。

2 研究の仮説

自らの人生観や価値観を深めていくことが、進路選択や人生設計にどう関連しているかを考えさせる。

3 研究の経過

【今年度の実施計画】

- 4月 職業適性検査や卒業生による進路体験発表会を通して、自らを知る機会とする。
- 6月 「在り方生き方教育」教材「明日をめざして」を使用する。
- 7月 職業適性検査結果を参考に活用する。
- 10月 「在り方生き方教育」教材「明日をめざして」を使用し、荻野吟子の生き方を学ぶ。
- 11月 「在り方生き方教育」教材「明日をめざして」を使用し、渋沢栄一の生き方を学ぶ。
- 12月 キャリア教育 レディネステスト受験
 - 1月 レディネステスト結果を考察しながら、自分の適性を確認する。
 - 2月 卒業生の体験談や分野別説明会を通して、自らの能力適正を確認する。
 - 3月 「自分の夢は？将来の職業は？」を中心に、自己PR会をすることで対話的で深い学びに繋げる。

今年度は新型コロナウイルス感染症の影響で、臨時休業及び分散登校を経てから通常の学校生活が始まった。1年生は入学式やオリエンテーション等の高校生活を送るために必要な指導が不十分なままスタートすることになった。また、先行きが不透明なことや限られた時間の中で生徒の人生観や価値観を深め進路選択や人生設計に繋げるため、学校行事や在り方生き方教育の指導内容も取捨選択しながら優先順位を付けて取り組む必要があった。そのため、年度当初の実施計画を見直し状況に合わせてながら進めることにした。

4 研究の内容

(1) 望ましい勤労観・職業観の育成

本校生徒は多くの生徒が卒業後就職する。そのため、在学中に望ましい勤労観や職業観を育み産業人として社会で活躍できるよう取り組んでいる。1学年では進路行事を中心に、自己理解を深めることや将来に向けてのロードマップを作成し「自分の生き方」を考えさせている

【入学時】10年チャート提出

【6月】職業適性検査実施

【7月】職業適性検査振り返り

【2月】3年生による進路講演会

【3月】卒業生による進路講演会

(2) 埼玉の偉人の生き方をもとに、商業高校独自の特色ある学習から自らの人生設計を作り上げる

埼玉県の大偉人である、荻野吟子、渋沢栄一、塙保己一の人生に触れ、偉人から人生との向き合い方、社会貢献や困難を乗り越えるための術、人としての在り方を学んでいる。今年度は「日本資本主義の父」と呼ばれる実業家の渋沢栄一を題材とし、自己の利益を追求するのではなく、社会のため他の人びとのためになるビジネスや取り組み、ビジネス等で得た利益の一部を社会に還元していくことの意義などを考えさせた。また、商業科の科目の特性上、検定試験や資格取得に重きが置かれがちだが、「商業とは何なのか」「ビジネスに関する確かな見方や考え方」を学ぶ機会とした。

(3) 帰属意識の醸成

不安を抱えながら入学してきた1年生は、新しい生活様式に対応するためマスク着用やソーシャルディスタンスをとること、食事中に会話をしないよう求められた。例年行われる遠足、体育祭、文化祭、球技大会は軒並み中止か縮小された。行事を通して親睦を深めたり相互理解を図る機会が圧倒的に少なく、生徒同士のコミュニティが形成されにくい状況であった。そのため集団に対する帰属意識の芽生えが低く感じられた。

形式的に道徳教育や在り方生き方教育を進めることは、一方的な働きかけでなかなか生徒の心に響いていくことはない。結果として外的要因から圧力がかかるだけで生徒自身の内的要因から道徳的価値観の向上や自発的な行動を期待することは難しい。道徳心を養う前提として集団に対する帰属意識が醸成されていないと指導効果があがらない。今年度は、クラス単位で目標を立て生徒が中心となって考え行動する機会が全くなく、学年、学校はおろかクラス単位の帰属意識も形成されにくかった。そのため、当初計画にはないがクラス単位で壁画の立案作成を行うことにした。密閉、密集、密接の3密を避けたり飛沫感染が起こらないような取り組み、かつクラス単位で行い帰属意識の醸成が図れると考えた。

5 研究の成果と課題

(1) 望ましい勤労観・職業観の育成

コロナ禍の影響で予定どおりに進路行事や生徒の意識高揚、啓発を進めることが非常に困難であった。学校年度行事計画が状況に応じて変更されることやコロナ禍特有の指導の増大、学年単位の集会や外部講師による講話等あらゆることに緊急対応や制約があり例年同様の指導をすることが難しかった。

その中でも、10年チャートを活用し人生設計のイメージを組み立てさせ、逆算していくと「今なにをすべきか」を理解させ、目の前にある小さい目標を一つずつ達成し積み重ねていくことの重要性を理解させた。その結果、資格取得では上位級や将来必要と考えられるスキルを身に付けるため、自ら積極的に取り組む生徒が多く見受けられた。また、卒業生や先輩から進路活動の実体験を聞くことで、高校から社会に出ていくことの難しさや厳しさ、社会に出ていくための準備期間としての高校生活の在り方について理解させることができた。

(2) 埼玉の偉人の生き方をもとに、商業高校独自の特色ある学習から自らの人生設計を作り上げる

各種産業の育成と多くの近代企業の確立に努めた渋沢栄一思想「国全体を発展させるためには広く産業を興し経済を発展させなければならないが、その富は国民全体で分けるべきだ」という観点を主題とした。「明日をめざして」を教材とし渋沢栄一の生き方や考え方を生徒に理解させ、なぜ、「ビジネスを行うのであれば、ただ利益を追求するだけではいけないのか」「社会のため、他の人びとのためになるビジネスでなければならないのか」を考えさせた。また、渋沢栄一の生き方を受け再度生徒自身が商業高校で学び力をつけたい内容がなんであるかを考え、自己の進路にどのように繋げたいかを考え発表させた。

生徒は受け身で日々の教科指導を受けることが多く、商業科目を通じて主体的に考え判断し自分の意見や考えをまとめる機会が乏しかったが、渋沢栄一の思想や生き方に触れたことで、商業の在り方や産業人としての生き方を改めて考え向き合う機会を作ることができた。

(3) 帰属意識の醸成

あらゆる教育活動の根底に必要だと考えている帰属意識の醸成を図るため、生徒主体でクラス毎に壁画制作を行った。例年どおり学校生活を送ることができていれば、遠足・体育祭・文化祭等の行事を通してクラスや学年、学校に対する帰属意識が醸成される。しかし、今年度は新型コロナウイルス感染防止を理由に中止、縮小が相次ぎ帰属意識を育む機会や自分に挑む場が失われた。そのため、感染防止を最優先としながら何か一つでもクラスでやり遂げる取り組みが必要だと考えた。限られた予算と時間の中で各クラス2m四方程度の大きさの作品とし、5mm四方のマスキングテープで色を塗り作品を完成させた。華やかな作業ではないが一人ひとりが地道に与えられ

た役割を果たすことで一つの目標に向けてクラスで協力することができた。

活動を通してクラスの意義や集団の中での自己の在り方を考える機会となった。また、作品を完成させたことでクラスの一体感が生まれ集団としての成熟度が増した。帰属意識の醸成を図ることで外的要因からでなく内的要因から自己の生き方、人生設計を考え主体的に判断行動できるようになることを今後も期待したい。

【完成作品】



(4) 今後の課題

自らの人生観や価値観を深めていくためには、教科指導だけでなく学校行事等を通じた生徒の主体的な活動が必要不可欠である。コロナ禍の状況下で新たな生活様式が求められたり学校行事の在り方が大きく変化している中、新しい道徳教育と学校行事の相互補完的な関係がより一層求められると考える。また、道徳教育が目先の結果を求めるための一方的な指導となるのではなく、長期的な視野を持ちながら生徒自身の内的要因の変化や自発的行動が起こせるよう継続的に指導を行う必要があると考える。